

[010] 九州大学附属図書館研究開発室年報 :
2005/2006

<https://doi.org/10.15017/3226>

出版情報 : 九州大学附属図書館研究開発室年報. 2005/2006, pp. 1-77, 2006-06-01. 九州大学附属図書館
研究開発室
バージョン :
権利関係 :

シンガポール学術図書館視察報告

兵藤 健志*

〈抄 録〉

2005年12月4日から12月9日までのシンガポール出張のうち、ニー・アン・ポリテクニク (Ngee Ann Polytechnic)、シンガポール国立大学 (National University of Singapore)、テマセック・ポリテクニク (Temasek Polytechnic) という3つの学術図書館に関する視察報告である。主にRFIDおよび「ライフスタイル (Lifestyle)」という概念を軸に報告を展開する。

Inspection report on Academic Libraries in Singapore

HYODO Kenshi*

1 はじめに

2005年12月4日から12月9日まで6日間かけて、シンガポールおよびマレーシアの学術図書館・公共図書館を訪問した。訪問の概要については下記の通りである。

訪問者

南俊朗 (九州情報大学)、兵藤健志 (九州大学)、佐田忠鴻 (長崎外国語大学)、喜田拓也 (北海道大学)、瀧澤儀意 (日販図書館サービス)、満尾哲広 (シェアード・ビジョン)

訪問先

12/5 (月)

ST LogiTrack

Institute of Technical Education

Ngee Ann Polytechnic

12/6 (火)

Bukit Batok Community Library

National Library Board

Library Supply Centre

12/7 (水)

National University of Singapore

Temasek Polytechnic

12/8 (木)

National Library of Malaysia

訪問の目的はRFIDの利用状況や電子図書館への先進的な取り組みを視察することにあつたが、いくつかの図書館を訪れるうちに、「ライフスタイル (Lifestyle)」という興味深い概念に行き当たった。

本報告では、この「ライフスタイル」に触れながら、訪問先のうちニー・アン・ポリテクニク (Ngee Ann Polytechnic)、シンガポール国立大学 (National University of Singapore)、テマセック・ポリテクニク (Temasek Polytechnic) という3つの学術図書館を対象を絞り、各館の概要やRFIDなど新しい試みの事例を紹介したい。

2 ニー・アン・ポリテクニク

ポリテクニクとは、大学に準ずる高等教育機関で、日本では高専に近いであろう。2006年4月18日現在、シンガポールには3つのユニバーシティと5つのポリテクニクが存在するが、ニー・アン・ポリテクニクは2番目に歴史の古いポリテクニクである。

2.1 RFID

ニー・アン・ポリテクニクで採用しているRFIDは3M社製であり、自動貸出装置、ブックドロップ、ソーターシステム、蔵書点検などに活用しているが、特にセキュリティの面に配慮した運用となっているようである。例えば、自動貸出装置については、IDカードを紛失した際の悪用

*ひょうどう けんし 九州大学附属図書館医学分館受入目録係 E-mail: kenshi@lib.kyushu-u.ac.jp

を防ぐために、カードを読み取らせた上で、さらに暗証番号を入力しなければならない。また、ブックドロップについては、トラブルが起きても対処できないため、閉館時にはRFIDを使わない旧式のものしか利用できないようにしている。

2.2 ライフスタイル図書館

ニー・アン・ポリテクニクの図書館は建物の2階から5階を占めているが、2階のフロアを「ライフスタイル図書館 (Lifestyle Library)」、3階から5階のフロアを「アカデミック図書館 (Academic Library)」と称している。ホームページの案内によると、「ライフスタイル図書館」とは「学際的研究、能力開発、社交的で娯乐的な必要性 (interdisciplinary studies, personal development, social and recreational needs)」を満たすためのものであるとの説明がなされているが、カリキュラムを支えるための「アカデミック図書館」と対比してみるとその特徴が浮き彫りとなる。

例えば、「アカデミック図書館」のコレクションは学術書が中心となるが、「ライフスタイル図書館」のコレクションは伝記・ビジネス・経営・コンピュータ・インターネット・小説・医療・語学・エンターテイメント・スポーツ・旅行・趣味さらには漫画といった学問とは直接関係のないものに及んでいる。また、これらの資料が単に書架に配架されているだけではなく、ライトアップされていたりショーケースに入れてあったりして見せ方に工夫がなされている。



写真1：ニー・アン・ポリテクニクのライフスタイル図書館

オーディオ・ビジュアル関係もこの「ライフスタイル図書館」に集められている。CD・DVDの置いてあるスペースは人気歌手や俳優のポスターが天井からつるさされてあたかもレコード店のような雰囲気を醸し出していた。また、有線放送のようにチャンネルを選択して好みの音楽を聞ける設備やグループでケーブルテレビを視聴できる場所、さらには、インターネット・カフェなども館内にあり大変驚いた。



写真2：ニー・アン・ポリテクニクのCD・DVDコーナー

学問から離れた軽い読み物やオーディオ・ビジュアル設備は日本の大学図書館でも見られるが、シンガポールの学術図書館においては、それが主要なサービスの一つとして前面に打ち出されている点に注目すべきであろう。時折九州大学においてブラウジングルームにあるような軽い読み物についての不要論を耳にするが、シンガポールの学術図書館では全くそのような迷いの微塵も見られないのである。図書館は、利用者の学習・教育・研究を支援するだけでなく、それらを内包する生活空間を提供する場として認識されており、学生をその場に惹き付ける魅力的な存在なのである。

2.3 その他のサービス

RFIDや「ライフスタイル図書館」以外にも興味を引いた試みとしては、「Ask a Librarian Service」や「Reader's Choice」といったサービスが挙げられる。

「Ask a Librarian Service」とは、オンライン・レファレンスサービスに音声チャットの要素を組み込んだものである。利用者は専用のソフト

がインストールされたパソコンを使ってレファレンスライブラリアンをすぐに呼び出すことができ、文字を伝えるだけでなく電話のように話をすることもできる。また、お互いの端末のブラウザ表示を共有することができるので、例えば、あるオンラインデータベースの使い方が分からないといった場合には、実際にその場でデモンストレーションして相手に見せることも可能である。つまり、オンラインでありながら、なおかつ直接対面してレファレンスを行うのとはほぼ同等の効果が得られるのである。なお、このシステムは業者から購入したものではなく、ニー・アン・ポリテクニクの図書館職員が開発したというから驚きである。

「Reader's Choice」とは教職員や学生によるお勧めの本を紹介するインターネット上のコーナーである。日本でも流行しているウェブログを採用しており、教職員や学生は感想をやりとりすることで交流をはかっているようである。また、紹介された図書に対してOPACやAmazon.comへのリンクが貼られており、ワンクリックで購入を含めた入手可否が分かるようになっている。

3 シンガポール国立大学

シンガポール国立大学はシンガポールで最大規模を誇る大学である。図書館の統計を少し紹介すると、2005年7月の時点でのユーザー数は、学生33,715人、教職員8,526人である。また、蔵書は、図書1,171,044タイトル、雑誌12,981タイトル、電子媒体24,092タイトルを所蔵しており、今回訪問した中では最も九州大学附属図書館に近い規模であろう。

3.1 RFID

RFIDについては1999年から採用計画がスタートし、翌年の6月にはタグの貼付を開始している。2001年には開架分の貼付を終了して、現在およそ160万冊にタグが装備されており、最終的には200万冊を目指しているそうである。このように計画から貼付まで迅速に展開できたのは、多額の予算が措置されたからとのことであった。

採用しているRFIDは3M社製である。自動貸出装置やブックドロップなどに活用している

が、驚くべきことに、ブックドロップは、経費削減という理由から職員の手作りである。正面から見ると手作りとは思わせないデザインとなっているが、裏側からは、座布団や段ボールやガムテープの切れ端やらが垣間見られいかにも間に合わせの工作といった印象を受ける。しかし、手作りだからといって既製品と比べて機能が落ちるわけではない。図書をブックポストに入れると同時に図書館システムで返却処理も行われるような仕組みになっている。



写真3：自主制作ブックドロップの舞台裏

3.2 情熱と笑顔

シンガポール国立大学の図書館は、中央図書館、中国図書館、法学図書館、理系図書館、医学図書館、ホン・スイ・セン記念図書館の6つからなるが、今回の訪問で中央図書館と中国図書館とを視察することができた。訪問して初めに概要のプレゼンテーションが行われたが、その冒頭で披露された図書館のミッションに感銘を受けた。

Mission

To deliver just-in-time information with passion and a smile

図書館の任務は適切な情報を利用者へ届けることであるが、ただ情報を提供すればそれで良いというものではない。そこに「情熱と笑顔」が伴わなければ十分に使命を果たしているとはいえないのである。シンガポールの図書館といえばRFIDなどの先進的技術のイメージが先行して

いるが、一方でこのような精神的・意識的な要素も大事にされていることが分かる。

また、この「情熱と笑顔」という精神はニー・アン・ポリテクニクの「ライフスタイル図書館」へ通じる考え方でもあろう。シンガポール国立大学図書館においても、利用者を第一義にとらえ、利用者にとって快適なサービスや空間を提供することに力点が置かれており、図書館は単に学習の場にとどまらない。例えば、ガラスを基調とした建物や入館ゲート入ってすぐの広々とした空間やお洒落なソファは高級ホテルのロビーにも負けないような居心地の良さがあり、インターネットや飲食や談笑のできるスペースも確保されている。



写真4：シンガポール国立大学図書館の開放感溢れる空間

おもしろいのは、飲食や談笑のできる場所を「いきいき地点 (Perk Point)」、携帯電話の使用できる場所を「おしゃべり地点 (Chat Point)」と称し、さらに、学習スペースを「静かな区域 (Quiet Area)」と称している点である。そもそも「図書館では静粛に」という前提があれば、わざわざ「静かな区域」と名付ける必要はない。固定概念から離れて、スペースをはっきり分けることで快適なサービス空間を実現しているのであろう。

4 テマセック・ポリテクニク

1995年に設立されたテマセック・ポリテクニクはシンガポールで3番目のポリテクニクである。2003年に現在の地域に移っており、図書館の建物も非常に新しい。

4.1 RFID

RFIDは2004年12月から3M社製のものを導入している。自動貸出装置、ブックドロップ、ソーターシステム、蔵書点検などに活用しているが、他の学術図書館と同じくセキュリティーの面に気を配った運用となっている。例えば、ブックドロップについては、確実に返却処理がなされたことの証明として必ずレシートを受領するよう利用者へ指導している。また、RFIDタグは悪意のある利用者に剥がされる恐れもあるため、ブックディテクションにはRFIDではなくタトルテープを使用している。

4.2 ライフスタイル・フロア

テマセック・ポリテクニクの図書館も一つのフロアを「ライフスタイル・フロア (Lifestyle Floor)」と明確に位置づけて利用者へサービスを提供している。

視聴覚資料を重視している点やコレクションの内容や設備の優れたデザイン性などに関してはニー・アン・ポリテクニクとほぼ同様であったが、テマセック・ポリテクニク独自のものとして「ポディウム (Podium)」という設備を挙げることができる。「ポディウム」とは館内に設けられた劇場スペースで、学生が自由に音楽を披露したり劇を上演したりできる舞台である。「ポディウム」と他のスペースには何の仕切りもないが、特に利用者から苦情もないという。これは、「ライフスタイル・フロア」が騒音を前提にした空間となっているからであろう。実際にこのフロアでは、職員は学生に「静かにしてください」ではなく「もっと騒いでいいですよ」と声をかけるそうである。



写真5：テマセック・ポリテクニクのライフスタイルフロア



写真6：テマセック・ポリテクニクのポディウム

また、他の学術図書館でも見られた利用者志向はここにおいてさらに際立ったものとなっている。カウンターの「お客様サービス (Customer Service)」という標識には驚いたが、テマセック・ポリテクニクの職員には当然のことのようである。職員の関心は常に利用者の満足へと向けられているのであろう。あちこちに貼付されていた掲示物は視覚的に人を惹きつけ大変理解しやすいものであったが、このようなものを見るにつけて、利用者の目線に立つ大切さをあらためて実感するのであった。実際にテマセック・ポリテクニクの図書館には掲示物を作成するための専門の作業部屋があり、利用者への案内や広報を重視していることがうかがい知れた。

5 おわりに

快適に演出された生活空間がRFIDなどの高度な技術と融合しているシンガポールの学術図書館を視察し、また、それを可能にしている技術力と意識の高い職員の方々と意見交換できたことは、私にとって大きな収穫であった。

視察報告の最後として、現地で入手した小冊子*Newsletter of Temasek Polytechnic Library*の2005年9月号の一部を原文のまま抜粋させていただく。ここには図書館員に必要とされる特殊な能力がリストアップされている。

Some Special Skills needed by Library Staff

- IT literacy, Including WindowsXP, email and word processing programmes
- technological literacy, including photocopiers, PC hardware, and networks
- working knowledge of library systems
- familiarity with library cataloguing and classification tools
- knowledge of web programming and development
- inside knowledge of the workings of OPAC
- management skills
- ability to find out exactly what the patrons need without causing offense
- flair for interior decoration
- strong muscles to re-shelve all the books that are used every day
- a well-developed sense of humour

ITを活用する能力、システムの知識、マネジメント能力、利用者の要求を読み取る力、インテリア装飾の心得、ユーモアのセンスなど様々な能力が言及されているが、今回の視察で垣間見ることのできたシンガポールの図書館のエッセンスがここに詰まっているような気がしてならない。大雑把な捉え方だと承知しているが、総じていえば、シンガポールの図書館における技術レベルと意識レベルの要求の高さがここに表現されているのではないだろうか。自分自身がこの項目の中でどれだけの条件を満たしているだろうかと考えると、非常に恥ずかしい思いであるが、いつも笑顔と情熱だけは忘れないように今後も精進していきたい。